

〔書評〕

山崎國紀著『評伝 森鷗外』

清田文武

著書「森鷗外―(恨)に生きる」(講談社、昭和五二)をはじめ「鷗外森林太郎」(人文書院、平成四)や「鷗外 熟成の時代」(和泉書院、平成九)等、「森鷗外を学ぶ人のために」(世界思想社、平成二)その他鷗外関係の編著の多い山崎國紀氏が、この度「評伝 森鷗外」を上梓した。

周知のように氏は、谷沢永一氏とともに学界に重要かつ貴重な研究誌(のち研究書)「森鷗外研究」を和泉書院より刊行して紙面を提供し、自らも多くの論考を発表していたのであるが、従来 of 著作を踏まえてのものではあるにせよ、今回の大冊は力業で雄篇と呼んでよく、私などには驚きの書であった。「あとがき」によると、六年の歳月を懸けたとあるが、その分量だけでも圧倒される。概算して四百字詰め原稿用紙でおよそ二千六百枚。それだけの執筆期間のことを思うものである。鳥根県益田市出身といえ、近世における藩は違ふけれども、鷗外とは隣接の地で、同じ石見国ということになり、それだけに他地域の者には微妙な点で

知り得ない事柄、感覚のかかわるところがあるにちがいない。親しく話をしたわけではなかったとしても、鷗外の師であった米原綱善の長女で森潤三郎氏の妻思都子さんに生前会ったことがあるなどという一事はそうした一つになるであろう。

書題に見える「評伝」の語は「その人についての批評をまじえながら書かれた伝記」(『日本国語大辞典』)の意味であるというが、まず津和野の精神的風土に筆をやり、藩学の源を築いた人と目される大國隆正に焦点を結んだ観のあることに一つの特色を見せている。長崎にも遊学して開明的で、藩では奨学を説いた人であり、確かに鷗外晩年の一文中郷土の先覚として敬重の表現をもつてしているが、その復古的とも見える方面はどうであったのかと、若き日の鷗外のこととも思われ、その点で、西周との関係にもう少し論を詳しくしてもらいたかったと考えたのであった。大國の「科学する精神」の内実がもう一つ理解しにくいからでもある。学問の淵源に遡るべきことの主張をめぐる問題では、大國とのつながりを否定するものではないが、西周の方が実際に影響が強か

つたのではないかとも思うからにはかならない。

藩校養老館の岡熊臣の存在、朱子学と陽明学との関係、実学への関心のことも上述の問題とのつながりで浮かび上がり、歴史的には、気風として家老の多胡の存在なども視野に入つて来るかも考えてみたが、津和野藩学についての論述には、詳細なところがあり、注目してよい書であろうと思われる。なお著者は、鷗外がライプチヒで日本茶の分析を行ったことについて、「何であつたのか。一向に解らぬことである」と述べている。私も詳らかにしないが、大國隆正との関係を想定するならば、富国のための経済から国際的に日本茶の輸出を説いていたことが鷗外に作用した点もあつたものであろうか。

本書で次に思われることとして、新資料紹介による学界への貢献である。大は、その一部分は少し紹介されてはいたものの、編著「森鷗外・母の日記」(三一書房、昭和五四)によつて、みねの日記全部を翻刻したことから、小は新資料の発掘あるいは紹介の労をとつたことに至るまでがあり、これを評伝に織り込んで、力を發揮していることである。前者は「半日」の解釈に関係するところが多いが、評伝としての従来の空白を埋める叙述も見逃せない。出征時の遺言については、つとに当時の民法等をおさえた渡辺善雄による論もあり、少しこれを視野に入れてみるかどうかであるかと思つてみた。著者も民法に触れて、妻に対する鷗外の考えは厳しい感があるとしており、それが一般の見方でもあるが、鷗外のこの時の家族の問題を含めての思量と生の方向につ

いての解釈の問題としてである。著者には「森家の三男坊」(三一書房、平成九)や編者としてかわつた森類著「森家の人びと」(同上、平成一〇)があり、これらも、この度の書を支えていることが読み取られる。

小とは言えないけれども、「ながし」が新資料「ぬれきぬ」によつて書かれた小説であることの研究なども注目される成果である。その関係資料も近く紹介されるといふ。その他三越のかかわる「流行会」との関係のことも、評伝的にも興味深い発掘であり、文壇における「ABC」氏の評論等、諸所にちりばめられていて関心を引くものが多い。氏の従来の著書で取り上げてはあるもの、これらに本書の叙述で改めて接するとき、読みの楽しみの一つとなる。こうした方面への文献資料追尋の労のことが思われるのである。

ここで一例を挙げると、新聞にも紹介された小池正直の石黒忠恵(公閣下)宛明治二十二年四月十六日の書簡である。この書簡による論は「文芸春秋」(平成一七・六)にも発表されて話題を呼んだ。書簡中「伯林賤女之一件ハ能ク吾言ヲ容シ今回愈手切ニ……近日総監閣下へ一書可サシ出候。○別紙森へノ書ハ……」と続くあたりが、鷗外関係解説のポイントにならうかと思われる。雑誌掲載の論に比べると、本書では叙述に手を加えてあるもの、○印の前後のつながりの問題のあたりは、なおまだ断層を埋めきれないように感じられるが、如何であらうか。しかし、当時の留学生の生活の一端、青年時代の鷗外が周辺の人にとつ映つ

ていたかを示す貴重な資料であることに変わりはなく、新資料再紹介の労をとった一事が思われるのである。

本書はまた鷗外の翻訳作品の梗概をすべて作っていることを一つの特色とする。当時鷗外を揶揄的に梗概博士などと呼ぶことがあつたらしい。しかし、山崎氏も述べるように、鷗外は要約を作ること自体にすでに批評精神が働いていると考えており、そのことによつて啓蒙活動に資するところのあることも考えていたといつてよい。一体鷗外には作品の翻訳が自身の創作活動に培うところがしばしばあつた。この方面においては、平川祐弘氏・小堀桂一郎氏その他の先学の比較文学的業績は重要であることというまでもないが、翻訳・紹介にかかわる鷗外の表現に着目する観点にもなお見捨てがたいものがあり、そのつながりから鷗外の精神のありようを知る方途を得ることもできるケースがある。本書にもそうした方面からのアプローチの一端が示されている。

なお、リルケの人と思想とを紹介した側面も認められる『現代思想』を、評者は注目すべきものと考えてるが、バーナード・ショウの『馬盗坊』を訳した際の関心の所在が示唆されているあたりなど、全体的把握ではないにせよ、訳業に関係する一文として見逃せないものがあるように思われる。著者もこの対話文に言及して、いわゆる危険思想の問題に触れ、「確かに鷗外は、この『家常茶飯』の思想に賛同してはいない。」と述べるが、この場合、反語的表現として読めないであらうか。

評伝としては、その埒外になるかもしれないが、文学史的観点

に立つとき、鷗外が後続の作家に与えた影響を考慮するならば、本書における右の作業はまた貴重なものとなる。が、著者は、モルナルの『破落戸の昇天』の梗概をまとめた条では、「何の印象も残さない。なぜ、こんなものを鷗外が訳したのか理解に苦しむ。」と記す。その翻訳意図は評者にもわからないけれども、原作者としては妻との愛情・離婚の問題が関係して、深刻な背景があつた。作中の人物名は異なるものの、この同一題材による短篇小説から戯曲『リリウム』を書き、当時これは上演されて西洋で反響を呼び、我が国でもこの作家に惹かれ、出身地ブタペストに留学した徳永康元のような人も出、矢田津世子のようにこの作家を愛読した人もいた。宇野信夫もその一人であつて、『破落戸の昇天』のような作品を書いてみたいとの思いを強くしたのであつたが、その宇野は劇作家としてセリフの技巧をモルナルからも学んでいた。これらが鷗外の訳を端緒としていたことを考えると、右の短篇には、文芸的にも顧みるべきものが潜んでいるにちがいないと思つたことである。

評伝として鷗外の生の区分においては、木下李太郎による「豊熟の時代」の設定は実態に合っていないと異を唱えたことは、その間の活動や創作についてみると確かに説得力があり、注目すべきものである。また明治三十二年から足かけ四年の、いわゆる小倉時代を左遷と捉える従来の定説を検討し直すべきであるというのも、同様の見解は他の研究者によつても出されているが、見るべき提言と言わなければならない。鷗外の心事を推測するとき、

その観点から、伝記的、文学的側面とそれに関連すると目される作品を評伝としての書の中にどのように捉え据えるかは、今後の研究における学界全体の課題ともなろう。

明治天皇に対する乃木大将の殉死以後、鷗外は他に、いわゆる現代小説も若干書いているが、歴史小説・史伝に力を注ぐ。この方面では、為政者と民衆との関係という観点からの照射が私には特に興味深いものがあつた。鷗外の作品を下敷きにして書いた長田秀雄、津上忠の戯曲と比べると、民衆という概念に鷗外の場合、もう少し限定を付けるべきが、その必要がないものか、なお残された問題はあるようにも思われる。しかし、「高瀬舟」のあることを考えると、この観点は妥当するとも見えるのである。このように本書は、さまざまに問題を根本的に提出するところが少なく、その点からも関心を引く著書である。

制約のある紙数の中で、しかも評伝という形式において、作品の一つ一つに納得のいく見解を出し、これを叙述するのは至難の業であろう。そうではあつても、「山椒大夫」や「最後の一句」などは、その内実、切り込みの視点はどうかあれ、「知恵」の観点からの照射と、「栗山大膳」の場合は「見切り」の精神の問題に、それぞれどの段階かで触れてもらいたいという気持ちを抱いたが、そういう既存の就縛を離れるところに解釈と鑑賞の醍醐味もあるのかもしれない。伝記と作品論との間の関係把握など、評伝における一般的課題であるとしても、総じて本書の筆を進める著者の姿勢と労苦に敬服の思いがするのが偽らざるところである。史伝に

関してのことでは、「伊沢蘭軒」の森潤三郎による新聞切り抜き等のことをめぐる論など、やはり貴重な仕事であるように思った。明治から大正への推移における鷗外の足跡、精神史の一鱗は、文芸的、伝記的にも関心をそそるものがある。そうした中に歴史小説・史伝が位置するわけで、評者にとつても重い課題であると記し、次に筆を進めなければならない。

宗教の問題としては、鷗外として仏教について多少は知っていたのであるが、身近に接したのは、小倉時代に曹洞宗の僧玉水俊鏡と知り合いになって禅学の講義を受けた時であろう。いわば〈知の人〉鷗外を解釈する際、宗教の問題は、その視点ともかわり、複雑で容易ではない事柄がからむにせよ、一顧を要することは間違いない。こうしたことからすると、晩年に臨済宗の僧・宗般老師の提唱を受けていることなど見逃してはなるまい。著書中この方面にも筆をやり貴重な叙述になっている。

特に遺言の解釈は、すぐれて評伝的テーマであるだけに、評者の手に余る問題であることを痛感する。ポイントは、石見人としての憤怒の情をそこに読み取るか、田中佩刀氏のような穏やかな心情の読み取りを織り込むかで別れることになろう。山崎氏の観点は一般的に受け容れやすく、有力な解釈になる方向にあるのではないかと思う。反響が待たれる。

若干の思い込みと思われるものに触れると、「鷗外漁史とは誰ぞ」執筆のことで「福岡日日新聞」の主筆猪股為治(次)を鷗外と同郷人としているが、新潟県出身ではなからうか。小倉から東

京に帰任したことを叙す中で、明治三十五年四月三日竹柏会において「マアテルリンクの脚本」と題する講演をしたことに触れているが、講演の中心となった『モンナ・ヴァンナ』の鷗外旧蔵本は、一九〇三年（明治三十六年）版の独訳であった。講演の日も翌年の四月十二日と訂正を要するかと思う。「生田川」に関係しては「新脚本『生田川』」について、山崎氏もこれから「大和物語及び唐物語、万葉集の長歌から取つた」と引くけれども、その後発表の「歌舞伎第百十七号『新脚本 生田川』」について「中、『唐物語』に生田川 material なし。」と記したことにも触れる必要はある。しかし、これだけの大冊になると、多少の違いがあつても、致し方ないことかもしれない。

山室静氏の同じタイトルの書に対し、こちらは新たな人物評を織り込む本格的な大冊で、在来なかつた類の書であり、裨益するところの多いものと考えられ、そうした書の刊行を慶びたいと思う。大部の書であるため、書評として、触れるべきことはなおあるのであるが、評者には『森鷗外―基層的論究』（八木書店、平成元）を『国語と国文学』誌上で取り上げたこともある。繁簡よろしきを得ず、書評的をはずし、また妄言を連ねたかと思うが、摺筆するに際し著者のご海容をお願いし、加餐をお願い申し上げる次第である。

（大修館書店 二〇〇七年七月二〇日 八四九頁

本体価格二二〇〇円）

（せいた・ふみたけ 放送大学客員教授）